

# 近世京都における与力・同心体制の確立

渡 邊 忠 司

〔抄 録〕

近世の与力・同心は遠国奉行の地域支配貫徹に必須の実務官吏であった。与力・同心こそが地域支配の実働部隊であった。与力・同心が存在してこそ支配機関としての役割を遂行できたといえる。地域支配に重要な役割を果たした与力・同心の存在意義を、

京都の与力・同心を対象に検証する。

キーワード 与力、同心、地附、御門番組、所司代、郡代、京都町奉行、大番組

## はじめに

近世徳川政権の地域支配の基軸は將軍直轄領の勘定奉行・代官・庄屋による百姓・村の支配と遠国奉行・与力・同心による町人・直轄都市の支配である。遠国奉行とは京都・大坂・長崎など一ヶ所の直轄都市に配置された諸奉行で、「地付」「土着」の与力・同心を用いて支配所としての都市と支配国という領域を支配・管轄していた<sup>①</sup>。

近世の与力・同心は遠国奉行の地域支配貫徹に必須の実務官吏であった。与力・同心こそが地域支配の実働部隊であり、いずれの遠国奉行も与力・同心が存在してこそ支配機関としての役割を遂行でき、

地域支配の実績を積み上げることができたのである。与力・同心の存在なくして遠国奉行の地域支配はなかったともいえよう。

しかしながら、地域支配の実働部隊としての与力・同心の職務の実態は必ずしも明らかではなく、研究も多くはない。与力・同心は、一般的に「地付」「土着」の武士ないし地役人として了解され、また解説される<sup>②</sup>。この地付・土着化が与力・同心の実務官吏化であり、与力・同心体制の確立といえるが、この過程について、筆者は大坂町奉行所与力の場合、元和五年（一六一九）の配属が「不時御用」つまり軍事的発動に備えた配属であり、その根拠が地方知行にあること、それが元禄四年（一六九二）に現米給与へ切り替えられて最終的な土着

化が確定されたことを明らかにした。<sup>3)</sup>しかし、京都の与力・同心、特に与力の土着化の実態解明は遅れている。本稿は、徳川政権の畿内・西国支配の基点であった京都の与力・同心の実態と土着化の過程を検証する。京都は京都所司代と京都・大坂および伏見・南都・堺の各町奉行による上方八ヶ国を中心とした畿内・西国支配の拠点であり、支配網の拠点であった。それゆえに、徳川政権下での京都の与力・同心の登場とその土着化の過程、つまり与力・同心体制の確立過程は畿内・西国の支配機構の確立とみられ、その関連で検証される必要がある。徳川政権の地域支配の実情と特質の把握のためにも、地域支配の実務を担う官吏としての与力・同心の実態解明が急務である。<sup>4)</sup>

近世の京都には、宝暦九年（二七五九）の『京都武鑑』にみられるように、京都所司代・京都町奉行・二條城御門番組のほか総勢で与

表1 徳川政権の京都役職と与力・同心

役職	与力（騎）	同心（人）	与力給与	同心給米	備考
所司代 組	50	100	200石	10石三扶持	寛永二年（1625）～元禄12年（1699）
二条城代組	10	30			
禁裏附（二組）	20	80	150	（10石三人扶持）	宝暦九年同心76人
一組	（10）	（40）			切米御扶持不同
二条御在番（二組）	20	40	80	30俵二人扶持	四月代り／同等の合力米加増
（大番頭・組頭4・組衆50）配下	（10）	（20）			（組頭600石・組衆200石）
二条御鉄砲奉行	—	10	—	（10石三人扶持）	切米御扶持不同
二組	—	（5）	—		
二条御蔵衆二人		手代8人	—	（10両三人扶持）	蔵番3人（3石5斗扶持不同）
二条御殿番一人					
御殿掃除方同心	—	11	—	切米扶持方不同	
二条御城番組（門番）	20	（40）	150	10石三人扶持	寛永二年伏見より移動
（北御門番組）	（10）	（20）			元禄12年組分け、切米61石余
（南御門番組）	（10）	（20）			
京都町奉行所	40	100	200	10石三人扶持	
西町	（20）	（50）			
東町	（20）	（50）			
京都代官					
小堀禁裏附					手代 18人 役席元 3人 金方 3人 御所御蔵方 2人 御所修理方 2人 川方 2人 地方 6人
伏見奉行（一名）	10	30	200	10石三人扶持	
奈良奉行（一名）	6	30	200	10石三人扶持	
合計	170	411	—	—	合計は設置当初の人数

備考：宝暦9年『袖中武鑑』（『京都武鑑』上）による。なお奈良は合計に含まず。

力一七〇騎、同心四一人が数えられる。なかでも京都所司代与力は五〇騎、同心は一〇〇人が配属され最大人数である。東西京都町奉行には総計与力四〇騎と同心一〇〇人が配属されており、人数では所司代に次ぐ(表1)。但し京都町奉行は寛文八年(一六六八)が成立年次で、その与力同心もそれ以後の配属となり、土着化の検証対象としてはやや不十分である。

そこで、ここでは京都所司代・二條城御門番組の与力・同心を対象に、その系譜と由来をたどりながら、その実態と土着化の過程を検証する。

## 一 京都の与力・同心の系譜

### (一) 京都所司代与力・同心の系譜

京都所司代の与力五〇騎・同心一〇〇人の定員は寛文八年(一六六八)板倉重矩の所司代就任時に確定した。その確定までは不同である。徳川政権にとって、与力・同心体制の構築は「安定した」地域支配遂行の要となっていくが、その由来・系譜をたどると、どの遠国奉行の与力・同心であっても最初は軍事出動の配属部隊であった。それは京都所司代与力・同心においても同様で、京都での最初の与力・同心の配属は京都所司代の設置とともに始まっている。その経緯を概観しておこう。

徳川政権の京都支配は関ヶ原役後の慶長五年(一六〇〇)九月二〇日に奥平美作守信昌が京都警固を命じられたときに始まる。<sup>5)</sup>同時に、

加藤喜左衛門正次が与力二五騎足軽五〇人を付属されて京都市中の治安維持に当たったが、足軽五〇人は後に同心と称される人数と考えられ、これが徳川政権の京都における与力・同心の端緒とみてよい。

信昌は約半年で任務を解かれ、慶長六年には加藤正次に加え、板倉伊賀守勝重・米津清右衛門勝清が京都三奉行として配置されている。

このとき米津勝清にも加藤正次と同等の与力同心が配属されたとも考えられるが、記録はない。<sup>6)</sup>勝重は同年九月二八日に所司代に任じられ、所司代と二人の奉行による京都市中と周辺地域の支配体制となったが、直後に加藤正次は職務怠慢から蟄居を命じられ、<sup>7)</sup>京都支配は所司代板倉勝重と米津勝清の二人体制となったとみられる。

この後、慶長八年(一六〇三)に板倉勝重が与力三〇騎同心一〇〇人を配属され、京都所司代与力・同心が登場した。これは『寛政重修諸家譜』(第二、以下『諸家譜』)勝重の項に、「豊臣家の旧例にまかせられて」とあり、豊臣政権期の京都奉行と同じ騎数と人数が配属されている。これはまた後の五〇騎・一〇〇人という所司代与力・同心の端緒であった。しかしその子板倉重宗が所司代を引き継いだ元和六年(一六二〇)に、この「附属」の与力・同心が廃止されている。<sup>8)</sup>

六年今の呈譜五年三月 父に継で京都の所司代職となる。このときさきに附属せられし與力三十騎同心百人を廃せられて、その俸禄を重宗に賜ひ、すべて二万七千石を領す。

このとき重宗は先に与えられていた六〇〇〇石に加えて、与力・同心の「俸禄」も給与され二万七〇〇〇石を領有することとなったが、この時点で重勝に配属させられていた与力同心は廃止されたことに

なる。

これは元和元年の豊臣氏滅亡以後に始まる畿内・西国支配体制の本格的な構築に対応して、所司代の職務分轄が進行し（表2）、五畿内・近江・丹波・播磨の郡代が設定される。郡代五味豊直や伏見奉行小堀政一の配置があり、それに関連して五味や小堀の下に与力・同心が配属されていく過程での変更とみてよい。<sup>9)</sup>

五味は元和元年に河内代官に任命された後、同二年には山城代官、元和七年には丹波国郡代、寛永六年（一六二九）には洛外と西国の代官となる。この年に初めて同心二〇人を配属されている。寛永十一年には五畿内の訴訟沙汰の取扱を命じられ、正保四年（一六四七）には丹波・近江の奉行となる。このとき与力一〇騎と同心一〇人を増加させ、すべてで与力一〇騎同心三〇人を配属されている。<sup>10)</sup>

五味は万治三年（一六六〇）に京都で没するが、同年一月二二日、この跡職は小出尹貞が任命され、与力一〇騎同心五〇人を配属されている。同心数は増加しているが、これは五味に付属していた与力と同心を増員され継承したとみられる。小出は寛文三年に没したが、付属の与力・同心は後の京都町奉行とその与力・同心に繋がるとみてよい。<sup>11)</sup>

また小堀政一は元和三年に河内の奉行、同八年に近江国の奉行、同九年に伏見奉行となり、寛永十一年に畿内の訴訟沙汰の取扱を命じられている。<sup>12)</sup> 伏見奉行小堀への与力・同心の配属は確認できないが、これは五味は旗本、小堀は大名であったためと考えられる。伏見奉行への与力・同心の配属は、正保四年三月三日、小堀病没の跡を継いで伏見奉行となった水野石見守忠貞のときである。<sup>13)</sup>

伏見奉行小堀遠江守小堀政一病没せしかば。書院番水野石見守忠貞をもて。これにかわらしめられ。千五百石を加へて五千石にさる。また与力・同心を属し給ひ。伏見辺の公料の地巡視命ぜらる。

また『諸家譜』の水野の項には、「伏見の町奉行となり、五畿内をよび丹波、播磨、近江等八国の奉行をもかねつとむ」とあり、小堀以後の伏見奉行も八ヶ国の奉行も兼ねた役職であったことが確かめられる。水野は寛文九年四月晦日に伏見奉行を辞職するが、これよりさきの寛文六年三月、『京都御役所向大概覚書』（以下『大概覚書』と略記）にも「石見守跡者郡代離レ伏見町奉行仙石因幡守（久俊）被仰付之」とあるように、伏見奉行が八ヶ国の奉行を兼帯する方式も解かれている。<sup>14)</sup>

なお、伏見奉行付属与力一〇騎・同心五〇人の定員は元禄十一年一月一五日に再置された際に確定した。<sup>15)</sup>

## （二）二條城御門番組与力同心の系譜

徳川政権の西国支配体制の京都市中における象徴は二條城である。その二條城の警固態勢の確立は元禄十二年（一六九九）である。その体制は、二條城追手門（東御門）と西御門を警護する御門番組と、大番組一二組から二組づつが一年（例年四月）交代で勤番し、御門番組を指揮する守衛体制である。御門番組は北組・南組と称され、それぞれ与力一〇騎・同心二〇人の態勢で月番交代であった。

御門番組の与力・同心は二條城常駐の役人で、京都地役人であった。

表 2 近世初頭の役職変遷と与力・同心

慶長 5 (1600)	9 / 20	京都所司代奥平信昌／加藤正次（与力25騎・足輕50人）				
慶長 6	9 /	京都の三奉行（加藤正次・米津勝清・板倉勝重〈京都の町奉行〉）				
慶長 6	9 / 28	京都所司代 板倉勝重（6年加藤蟄居）				
慶長 8 (?)		板倉勝重（与力30騎・同心100人）				
慶長16 (1611)	7 /	板倉、駅馬人夫制／禁中四方に築地設置（米津・大久保長安と共に奉行）				
元和元 (1615)		大坂城主松平忠明	元和元	五味豊直河内代官		
			元和 2 (1616)	五味豊直山城代官		
元和 5		伏見城代廃止／大坂城代（内藤信正）・大坂町奉行（久貝正俊・嶋田直時）設置			元和 3	小堀政一河内の奉行 伏見城本丸書院普請の奉行
元和 5 (or 6)		京都所司代板倉重宗（与力・同心廃止）				
			元和 4	五味・小堀御所造宮奉行	元和 4	女御御普請
			元和 7	丹波国郡代		
					元和 8	近江国の奉行
			元和 9	伏見城普請の奉行	元和 9	伏見の奉行
			寛永元 (1624)	二条城普請ほか沙汰	寛永元 / 9	二条城ほか普請沙汰
					寛永 4 / 11	仙洞御所作事の奉行
					寛永 5 / 9	二条城二丸普請奉行
			寛永 6 / 8	洛外・西国代官／同心 20 人配属		
			寛永11	五畿内の訴訟沙汰	寛永11	畿内の訴訟沙汰
			正保 4 (1647) / 4	丹波・近江の奉行（与力10騎・同心10人増加）	正保 4 / 3 正保 4 / 3	小堀没、水野田忠貞伏見町奉行（八ヶ国の奉行兼帯）
承応 3 (1654)	11 / 28	京都所司代牧野親成（明暦元年着任）				
			万治 3 (1660)	京都にて没		
			万治 3	11 / 22 小出・伏見町奉行（京にて禁中も担当）（与力10騎同心50人）		
寛文 8 (1631)	5 / 16	京都所司代牧野職免	寛文 5	6 / 25 京にて没	寛文 6 / 3 寛文 9 / 4	八ヶ国奉行免 晦伏見町奉行辞職日

備考：『慶延略紀』（内閣文庫史籍叢刊81）、『徳川実紀』、『寛政重修諸家譜』他による。

その二組の系譜をたどると、一つは慶長六年（一六〇二）に春日下総守入道（左衛門・景定）が与力三〇騎を預かって伏見城大手門の守衛を勤めたことに始まる。<sup>16</sup> もう一組は、慶長七年に柘植三之丞清廣が鉄砲足軽（同心）二〇人を率いて伏見城の御門番を勤めたことに始まる。<sup>17</sup>

慶長六年には二條城の築城が始まり八年には完成しているが、この時点では伏見城を拠点にした軍事態勢・機構があったことを示している。これは元和元年（一六一五）以降の京都所司代の職務分割に伴って変化し、元和五年には大坂城の直轄と大坂城代の設置によって伏見城の軍事的機能が大坂城に移り、寛永元年（一六二四）の伏見城廃城とその機能の二條城への移管、天守の二條城移設となる。

このとき二條城代も始まり、また伏見城守衛・警固の春日と柘植の組が二條城御門番組として、東大手門（東御門）を春日景定の嫡子家吉を頭に与力三〇騎の組、二條西御門奥番所には柘植清廣の養子宗次を頭に同心二〇人の組が配置された。<sup>18</sup> これは『徳川実紀』（以下『実紀』）寛永二年四月二日に記される。

大番頭渡邊山城守茂二條城の定番を命じらる。（重修譜に茂が二條定番となりし事は有て。年月をしるさず。いま江城年録によりて、に収む）大番三十人を支配す。是を三十人番といふ。番士は一年づゝにて交代せしむ。同心三十人あづかる。」伏見定番春日左衛門家吉。柘植三之丞宗次。伏見城より二條にうつり。左衛門家吉は與力三十騎。大手門番。三之丞宗次は同心二十人あづかり西の門番。其外蔵奉行二人もうつる。

二條城代は駿府城代からの転勤であったこと、またこの後元禄一二

年まで継続されたとする記録もあるが、廃止については『実紀』は寛永一二年五月とし、廃止後は大番頭二名による一年交代勤番となったと記し、「是二條在番交代の濫觴とぞ」と記す。<sup>19</sup> 「慶延略記」も同様に記し、寛永一二年の記事には城代廃止と大番頭保科弾正忠貞・阿部摂津守信盛の名をあげる。<sup>20</sup>

二条御城代渡邊山城守茂御役御赦免、従は大御番頭兩人組衆百人  
二条在番初ル、

保科弾正忠貞

阿部摂津守信盛

二條城代の名目については、享保期の京都町奉行所与力の記録も「布衣役位の軽き役人の任職には不当の名目にて、甚不審なり」という疑問が記され、城代ではなく「御城番頭」というべきであるとしている。<sup>21</sup>

また追手門（東御門）・西御門の門番は、この後それぞれ春日組・柘植組と称される二條城御門番組の始まりである。この経緯について、二條城御門番組の由緒記『御組由緒記』は「元祖柘植三之丞殿并御組貳拾人」の項で、「権現様 御代慶長七己亥年諸御組之最初ニ被為召出、享保十二丁未年迄百廿九年以来御奉公相勤候御組也」と記し、慶長七年からの享保一二年までの由緒を記し、また「渡辺山城守殿江戸へ御帰り、寛永十二丁同十三丙子年御番頭御支配成候迄之間者御所司代御支配ニ而有之候由」とあり、城代廃止後大番頭支配に替わるまでの一年間は所司代支配にあったことを記している。<sup>22</sup>

さきの『御組由緒記』によると、御門番組の与力・同心は寛永二年

表3 二條城与力・同心一覧（宝暦9年）

金田仁十郎組	大岡金兵衛
与力	与力
金原政之丞	城 武之進
内藤金右衛門	早苗縫之丞
丹羽亦十郎	鈴木小野右衛門
関戸久之丞	佐治長兵衛
内藤勝之進	須加井亮助
渡邊儀右衛門	村田権太兵衛
鈴木要助	中川仲之助
小倉兵橘	岡山儀左衛門
野条佐五右衛門	藤田武藤太
藤田彦十郎	藤井太右衛門
同心	同心
小嶋藤藏	井上儀右衛門
法 [ ]	向井佐右衛門
安井早太	林源左衛門
木寺新五右衛門	山田沢右衛門
大西八之丞	田邊大助
山田甚五兵衛	土肥次郎右衛門
三浦儀兵衛	中嶋彦六郎
青木清藏	井上平助
服部弾治	飛松久右衛門
木寺伴内	乾善四郎
川勝源藏	山田角右衛門
喜多利大夫	小原弥左衛門
桂林之進	山本五藏
磯野久兵衛	山崎清兵衛
竹内茂右衛門	小原左平太
小嶋政右衛門	原田市右衛門
柘植清五郎	祓 藤助
有馬幸介	永野安左衛門
於氣庄兵衛	松植金藏
松原与左衛門	宮川利右衛門

備考：『京都武鑑』

の二條城移動に際して、西御門柘植宗次の同心は二〇人のままであったが、大手門（東御門）の御門番となった春日家吉には「其節春日下総跡御役嫡子春日左衛門江被為 仰付候」として、それまでの与力三〇騎に加え、新規に同心一五人が召し抱えられている。

三拾騎之與力共者翌乙丑年当二條江引越、春日左衛門支配ニ而當二條 御城東追手御門御番相勤申候、此時左衛門。差図ニ而與力三拾騎惣御切米現米貳千石之内現米貳百石被相分、同心拾五人被召抱、御切米拾三石六斗宛ニ而下番相勤申候、右拾五人之同心家

筋之者共六人者今以御扶持方無御座、拾三石六斗宛拜領仕罷在候、この時点で、御門番組の与力・同心は春日組が三〇騎と一五人、柘植組が同心二〇人となり、全体では同心一五人の増員となった。この態勢で、寛永一三年から大番頭の指揮を受け、二條城大手門と西御門の管理を受け持つことになったのである。

この後の与力・同心の人員に大きな変化があったのは寛永一二年から一九年にかけて、元城代渡邊山城守付属の同心が配属替えされたときである。まず寛永一二年から一三年にかけて、一二人が大坂川崎に

あった大坂御材木方に配置換えとなり、次いで一〇人が二條御鉄砲奉行組へ、御門番柘植組には一九年に八人が配属された。この結果、柘植組は同心二八人となった。<sup>(24)</sup>

其後寛永十九壬午年 御城代渡邊山城守殿附同心八人御増人被為仰付、此時御組同心式拾八人ニ罷成申候而、往古與力者無御座候、

西御門番組は同心ばかりで与力はいなかったが、延宝四年（一六七六）に追手門（東御門）番組の頭であった水野甚五左衛門が三〇騎の与力のうち六騎を移した。これによって追手門番組が与力二四騎・同心一五人、西御門番組が与力六騎・同心二〇人の編成となった。

御門番組の与力・同心の編成は、さきに触れたように元禄一二年に確定する。その経緯について、『御組由緒記』は、所司代松平紀伊守在役のとき西御門番組の頭が罷免され、両組とも追手門番組の支配下となり、与力三〇騎・同心四三人のうちから勤務年数を勘案して与力一〇騎と同心三人を減員し、二組で一〇騎・二〇人に平均に組を分けたと記している。<sup>(25)</sup>

元禄一二年は、寛永一二年に大番頭など二條在番による城代職務の引継があった後に、二條守衛体制の最終的な調整が行われた時期で、御門番組にとっても機構の改変であった。それが与力・同心の人員整理（減員）と配属替えであったといえよう。これによって、寛永九年の秀忠死去の際に、「台徳院様 御遺物之御金寛永九壬申年十二月御譜代並頂戴仕候」とあるように、御門番組の与力がたとえ御譜代並に

扱われ、將軍の遺物を与えられたとしても、地付・土着の地役人として職務と勤務場所を固定されたのであった。

## 二 京都における与力・同心の土着化

### （一）京都所司代与力の役務の改変

元禄四年（一六九一）、大坂町奉行所の与力・同心は地方知行から給米（現米）に切り替えられた。この地方知行から現米への切り替えが大坂における与力・同心の土着化を実体化した。いわゆる知行高二〇〇石と一〇石三人扶持から現米八〇石、一〇両三人扶持への切り替えである。元和五年（一六一九）の大坂町奉行の設置がその始まりであるが、地方知行から現米への切り替えはその軍事配属部隊から地付土着の武士として最終的に職務の固定化と実務官吏として位置づけた。<sup>(26)</sup>

所司代の与力・同心も京都の地役人とみなされるようになった契機も同様であったとみななければならない。さきにみたように、所司代の与力・同心は慶長五年（一六〇〇）九月二〇日に加藤正次に配属された与力二五騎・足軽五〇人がその嚆矢である。この配属は関ヶ原後の奥平信昌の京都配置に従っていること、約半年後に「京都の三奉行」として、慶長六年九月二八日に板倉勝重・米津清右衛門勝清・加藤喜左衛門正次が任命され、加藤と同時に京都に配置された米津勝清には与力も足軽も付属させられていないこと、などから明らかに知行高に応じた軍事的発動であった。軍事的職務に対応する人員を確保できな



い場合、与力・同心が付属させられたのである。

板倉勝重はこの直後慶長八年に京都所司代に任命され、与力三〇騎・同心一〇〇人を配属されている。これが所司代与力・同心の始まりである。この後、さきに見たように、所司代与力・同心の定員は寛文八年（一六六八）に五〇騎と一〇〇人に確定された。

この後、与力・同心は現米八〇石、一〇両三人扶持の給与で職務を遂行した。その職務編成は与力は、同心支配（五人）、上納金役（二人）、外側御破損役（二人）、御蔵目付（三人）、旧記（三人）、同心は組頭（九人）、目付（四人）、御武具方（一三人）、旧記（四人）で、月番・非番と交代しながら京都市中の治安維持に当たっていた。<sup>27)</sup>

これが京都所司代の与力・同心体制であるが、地方知行から給米への切り替えがその契機である。それが元和六年の与力同心の廃止である。板倉重宗は「附属」の与力・同心を廃止された。重宗の『諸家譜』では、さきにみたように、「このときさきに附属せられし與力三十騎同心百人を廃せられて、その俸禄を重宗に賜ひ、すべて二万七千石を領す。」とあり、与力の知行を二〇〇石、同心の給与を一〇石三人扶持とすれば、与力分は六〇〇〇石、同心分は一〇〇〇石で扶持米を合わせれば約八〇〇〇石程度となる。

ここで注目しておきたいことは、与力・同心の俸禄を重宗に与えたという記事である。これは板倉勝重が慶長八年に与力・同心が配属されたとき、給与は地方で与えられていたことを示唆しているからである。さきに触れたように、同五年に加藤正次に与力二五騎と足軽五〇人が配属されているが、加藤への与力・足軽の付属は奥平昌信に随っ

た軍事的な出勤に伴う助力であったと見られ、大坂町奉行与力の場合を参考にすれば、まさに「不時御用」に備えるための与力・同心の配属であった。それが廃止されたことの意味に注目しておきたい。

重宗に関するこの年次には、元和五年三月と六年の両説があると注記しているが、それはともかくこのとき慶長八年以来の所司代与力・同心が廃止されたのである。なぜ廃止されたかは明確ではないが、京都所司代の職務の分轄と関係していることとみてよい。郡代五味や伏見奉行小堀に与力・同心が配属されていることはその証左の一端であろう。それと対照的に、重宗は元和八年には京都市中に対して二一箇条の掟書を発令し、所司代の職務が上方八ヶ国の管理よりも京都市中の統制に向けられ始めている。これは承応四年に牧野親成が出した九箇条の掟書とともに、京都市中の公事・訴訟に関する基本法令となったが、<sup>28)</sup>これらを考慮すると、元和六年の与力・同心の廃止は軍事的意味合いの濃い与力・同心が不要となったため、またその時点では京都市中の治安維持機構が与力・同心以外で可能であったためともいえる。<sup>29)</sup>

この後、所司代付属の与力・同心は承応四年（明暦元年、一六五五）に板倉重宗を継いで所司代となった牧野親成のもとで復活するまで存在しない。<sup>31)</sup>この時点では、与力・同心の配属は軍事的な「不時御用」に備えるためというよりはすでに承応期には、事務官吏の側面が強くなっていたとみられる。それは後にみるように、二條城御門番組与力・同心が島原の乱に際して出勤しようとした際に、江戸からきた老中に、与力・同心の役目ではないとして、差し留められたことから確認できる。

重宗の時期の与力・同心の廃止は、与力・同心の本来の職務（軍事的助力）が不要になったこと、役割の変化にあったといえよう。郡代や伏見奉行への与力・同心の付属は軍事的意味合いよりも民政に関わる助力の意味合いがあったとみなければならぬ。承応四年といわれる所司代与力・同心の復活は、正保四年に小堀政一が没し、万治三年には五味豊直が没するという京都所司代の職務の分担者たちが死去・老齢化するなかで、配属されていた与力・同心の配置換えも含めて、あらたな実務官吏体制が必要となったためといえよう。このうち、寛文八年の所司代は板倉重矩の代に五〇騎一〇〇人の与力・同心体制になるが、さきにみた与力・同心の役職からみても、実務能力の要求される職務内容である。

## （二）二條城御門番組与力・同心の土着化

慶長五年以降、伏見城（伏見城代）を拠点にした軍事態勢・機構は豊臣氏を初めとする畿内・西国の諸大名の威嚇・統制に重要な役割を果たしたが、元和元年以降にはその重要性は低下した。元和五年の大坂の直轄化と大坂城代の設置によって、軍事的機能は大坂城に移され、京都所司代の職務分轄とそれを分担する国奉行・遠国奉行の設置および与力・同心の配属も進行する。寛永元年（一六二四）の伏見城廢城と二條城へ機能の移管はその象徴である。

その二條城の警固に当たったのが二條城御門番組与力・同心である。さきにみたように、その前身は伏見城の守衛・門番であり、その配属は城番という軍事的出動の助力であったが、伏見城廢城に伴って二條

城追手門・西御門の門番に移動したのである。したがって配属当初は与力・同心らは將軍番城に守衛・警固という軍事的出動の一環としての意識が強かった。

慶長七年、伏見城番に召し出された春日上総守景定は現米二〇〇〇石に与力三〇騎を付けられて「御城御番」を勤めるが、その際に与力らは「甲前立物金之輪抜指物二福四半地花色向紋銘々自分紋ニ被為仰付」たとあるように、戦に向かう出で立ちと備えが当たり前のことであった。

この点は柘植三之丞清廣の場合も同様で、伊賀国松徳村の住人で、天正一〇年（一五八二）の家康伊賀越えの際に大きな功績があり、その後関ヶ原でも従軍して手柄をあげ、それらを土台に伏見城の御門番となった経緯がある。さらに象徴的なことは大坂の陣の際に出動した記事である。そこには「大坂表ニ而ハ三之丞儀ハ組召連何レ之手成共無構勝手次第働可申旨被為 仰付、御組之者大筒ヲ以相働、乾ノ櫓打崩候由申伝也」とあり、伏見城門番の頭と同心でありながら出陣して戦果をあげたことが記されている<sup>33)</sup>。

また寛永二年以降追手門番組の与力丹羽氏（三右衛門と学兵衛の代）は、元禄一二年以降は西御門柘植組の与力にかわるが、最初は丹羽氏俊が伏見城春日氏の配下として春日丸を守衛した。その丹羽氏も寛永二年の二條城引越以後でもなお緒書には「甲前立物金之輪抜指物二福四半地花色向紋」を持ち、唯今に至るまで「伝来仕候」と記している<sup>34)</sup>。

これらは与力・同心にとって、將軍番城の守衛が軍事的出動そのも

のであったことを示している。この与力・同心の意識を転換させる出来事が起こった。寛永一三年の島原の乱に際しての軍事出動の差し留めである。『御組由緒記』はその出来事を記している。<sup>35)</sup>

一肥后天草一揆之節者御所司板倉周防守殿依御差図、二代目三之丞殿御組被召連、

御本丸御具足御備被下大坂迄下向候処、松平伊豆守殿於大坂被仰付候者、二條 御城之御番ニ而候処天草江下向候事無用之由御差図也、三之丞殿被仰付候者御所司周防守殿御差図ニ而御座候、是非共下向可致之由御申ニ付、然ハ此方人数乗り候船計出シ、其外之船ハ一艘茂出シ申間敷、御船手へ御申付船留メ有之候故、無是非京都江御帰之由也、

御本丸御具足者

御タメシ具足 桶カハ胴紺糸威甲頭形り前立も  
の金之輪貫也、寛永十四年十二月ニ下向ノ由

これは肥後天草一揆の際に、所司代板倉周防守重宗の指図によって、二代目柘植三之丞宗次が組の同心を引き連れて、二條城本丸にあった具足を付けて大坂まで下向したところ、老中松平伊豆守信綱が二條城の御番であるから天草へ向かう必要はないと指図し、京都へ引き返すようにと命じた記録である。このとき三之丞は所司代からの指図であるから、是非とも天草へ下向したいと申し入れたが、伊豆守はこの方の人数だけを運ぶ船は出すが、それ以外は一艘も出さないと船手へも申し付け、船留めさせていると言われ、京都へ引き返したと記している。

この記事には、さきにも触れたように、所司代の与力・同心が元和六年に廃止され、また寛永一二年には二條城代も廃止されて管理が大番頭に代わり、御門番組は大番頭の配下に入ったときであった。御門番組は寛永一二年から一三年にかけて所司代の管理下に入り、二條城管理も所司代にあったために、しかも所司代の与力・同心がいない状況のもとで、所司代の指図に従ったと見られるが、その所司代の指図が簡単に否定されたのである。

ここには、与力・同心が本来の軍事的出動の助力という位置づけではなく、大坂町奉行など各地の遠国奉行・役人の配下として、すでに職務・勤務場所に固定された下級役人（事務官吏）と見られていたことが示されているといえよう。<sup>36)</sup> 御門番組の与力も大坂町奉行所付属の与力など他の与力と同様に「御譜代並」の存在として扱われていたが、実際は旗本や御家人とは異なる地位に置かれていたのである。

この点は後の記録になるが、『統徳川実紀』第四篇の文久二年（一八六二）閏八月二八日の幕政改革の条で、譜代と御抱の区別が再確認されているが、それによると、与力・同心は本来的に御抱であったことが確かめられる。

旗本であれば、地方知行は当然のことであったが、与力の場合は大坂町奉行所与力のように、また京都所司代板倉重宗の事例のように、奉行や所属役職の役職に含まれる形式をとるが、それがさらに進めば現米給与に切り替えられる。<sup>37)</sup> 二條御門番組与力の場合、寛永二年以降は現米六一石三斗五升という表示になっており、二〇〇石の現米八〇石より少ない。二條御門番組が將軍番城の守衛・警固役であったとし

ても、与力・同心であるかぎりには、配属当初から土着・地附の武士・役人として処遇されていたことを示している。ちなみに、西御門番組の初代の頭であった柘植三之丞清廣は地方知行三〇〇石の旗本であった。

御門番組の与力にとって、「不時御用」など緊急の軍事的な出動から除外される、象徴的な出来事が天草出陣の差し留めであろう。これ以後、御門番組の与力・同心は元禄十一年の組の再編成を経て、二條城御門番の職務を熟知する地付の役人として対処されるようになるのである。

### 三 京都の与力・同心体制の確立

#### （一）京都町奉行所の成立

徳川政権の地域支配は遠国奉行を核にして遂行された。その支配の遂行には地付・土着の武士と称される与力・同心の存在が大きいが、実務体制としての京都における与力・同心の確立時期は、これまでみてきたように元禄一二年（一六九九）にある。その体制の確立は京都町奉行所における与力四〇騎・同心一〇〇人の定員が固定されたときであろう。

京都町奉行所の与力同心の成立過程をみると、京都所司代と郡代・伏見奉行の設置との関連で配属された与力・同心の動向と密接に連動し、地付の武士、地役人として職務と勤務場所が固定化されていた。寛文八年（一六六八）の京都町奉行と与力二五騎・同心五〇人の成立

はその一つの結末であらう。<sup>(38)</sup> それに至る経緯を確かめておこう。

寛文五年八月六日、宮崎重成（若狭守、東町）と雨宮正種（対馬守、西町）が伏見町奉行に任命された。『諸家譜』には「伏見の町奉行」とあるが、『慶延略記』の同年七月一三日の条には京都郡代に補すとされている。<sup>(39)</sup>

同（元月三日） 御小納戸宮崎七右衛門重成、大納戸雨宮権左衛門正種補京都郡代

この時点では、伏見奉行はそれまでの上方八ヶ国や西国地域に対する統制・管理役職としての意味合いが色濃く残り、五味豊直・小堀政一の果たした役割の継続として意識されていたといえよう。京都郡代の肩書はそれを物語る。

この点は、万治三年（一六六〇）一月二二日に五味豊直の跡職として配置された小出越中守尹貞が「伏見郡代」と肩書されていることと同じ意味合いであらう。『慶延略記』は水野石見守跡職とし、また小出が寛文五年六月二五日に死去したとの注記を付け、その肩書を京都郡代としている。<sup>(40)</sup>

寛文五年六月廿五日  
京都郡代小出越中守尹貞

卒ト  
アリト 伏見御郡代  
コ、ニ伏見ニツケルハ非ナリ

水野石見守跡  
小出越中守尹貞

千四百石御加増五千石与力十騎

水野石見守は正保四年（一六四七）三月三日に小堀政一の死去を受けて、伏見奉行となり、上方八ヶ国の奉行兼帯となっていた（表2）。水野はこのとき「伏見辺の公料の地巡視」を命ぜられており、小堀の職務を引き継いでいることが確かめられる。またこれは寛文六年三月

表 4  
由緒書に見る与力・同心の成立と変化

慶長 7 年	「伏見城城番」春日夜総 「与力30騎」
寛永元年	伏見城天守二條へ移転
寛永 2 年	「城番春日左衛門」「与力30騎」「二條東追手門御門番」へ移動 同心15人召し抱え（1人切米13石6斗宛／与力給米2000石から200石分与） 春日配下の与力30騎・同心15人
寛永 9 年	台徳院（秀忠）遺物金拝領（譜代並み）
寛永12年	金二千兩拝借（与力30騎）、明暦元年まで20ヶ年賦で返納
寛文元年	頭交代時の儀礼変更 所司代が頭役宅での「与力御引渡」を「奉書」伝達形式へ
延宝 4 年	与力30騎のうち6騎西御門番所へ振り分け、城番組与力24騎
貞享 3 年	「御預之与力」から「御影之与力・同心」と改称

組の頭と組の由緒（金田仁十郎組）

慶長 4 年	伏見城番御門番頭柘植三之丞（組の頭初代） 同心20人（10石3人扶持）「預」（柘植三之丞は天正10年の伊賀越に「忠節之儀」に由い縁）
寛永元年	伏見城天守二條城へ移転、西御門奥番所勤柘植三之丞と同心20人へ移動
寛永19年	二條城代渡邊山城守、付同心 8 人増員、組同心28人（与力はなし） 同心28人で西御門御番所勤務
延宝 5 年	与力 6 騎配属、城番組与力30騎より振り分け

番方と勤務形態

御城番組与力御番勤方	内 訳
①当所より 元禄12年まで	御番勤方一番組・二番組・三番組で東大手門御番所に順番に勤務 三組に組み分け以前は組頭役三人を軸に勤務 組み分け以後は
②延宝 6 年から 元禄 2 年まで	与力・同心による狼・猪・鹿作下荒らしの獣狩り 京都所司代よりの指示
③元禄12年	与力10騎同心3人減員、「御城番」から「御門番頭」へ 「東大手門御番所」城番与力24騎、同心15人／「西門御門御番所」与力 6 騎同心28人 同格の組に改変「御門番組」へ 与力20騎・同心40人態勢へ 頭山岡七右衛門跡役美濃部彦左衛門と鈴木市兵衛跡役柘植三之丞 与力10騎・同心20人宛支配、東西御門番所10日交代で勤務 与力切米61石3斗5升に平均
④減員の与力・同心	10騎と 3 人のその後 山岡 7 右衛門とともに江戸へ帰参／譜代同様 再宥抱もありの申し渡し 与力10騎の 3 人 貞享年中 御年鷹匠・平御勘定・火之御番へ割入

備考：丹羽家文書『御組由緒記』による。

に八ヶ国の奉行を免じられたとする記事からも確認できよう。<sup>41</sup>「慶延略記」の記事は水野の跡職とする肩書を誤りとして、本来は五味豊直の跡職であり京都郡代の肩書が正しいことを注記しているのである。

宮崎と雨宮はこの小出の跡を引き継いで、伏見奉行となった。このとき両者共に五〇〇石の加増があり、廩米を采地（地方知行）に改められている。その後宮崎・雨宮は同八年七月三〇日に京都町奉行に任命されたが、両者共に家譜には「京都の町奉行を兼」と記している。<sup>42</sup>

これらはこの時点での伏見奉行の格式の高さと役職の重要性を示しており、また『大概覚書』においても「寛文五巳年両郡代ニ成候」とあり、伏見奉行は上方八ヶ国に関わる役職として認識されていたようである。また『大概覚書』には、京都東町奉行の役屋敷は五味豊直の屋敷の引き継ぎが記され、屋敷は五味の跡に伏見奉行となった小出越中守に売却されたが、それが宮崎に引き継がれた。いずれも京都市中の管轄・統制に制限された所司代の職務からの引き継ぎを示している。

京都町奉行所の成立年次については、寛文五年・八年、また一〇年などの諸説がある。たしかに寛文八年の時点では、五年に宮崎・雨宮が伏見奉行となった時点では水野忠貞はなお伏見奉行であり、水野が正式に辞職した年次は寛文九年四月晦日であった。水野の跡は仙石因幡守久俊で、仙石の代から伏見奉行は郡代の職務を離れたとされている。<sup>43</sup>郡代職からの分離は寛文八年以後の宮崎・雨宮も同様で、その意味からも京都町奉行の確立を寛文一〇年とする指摘は正当であろう。<sup>45</sup>

## （二）京都町奉行所与力・同心の確立

京都所司代の職務権限は、元和六年（一六二〇）以降上方八ヶ国および西国全域に及ぶような軍事的・政治的統轄の職務が郡代や伏見奉行また大坂町奉行や南都奉行・堺奉行ら遠国奉行に分割され、京都市中の治安維持と公事訴訟に限定され固定化されるようになった。それは表5の役職が示しているように、またすでに指摘されているように、板倉重宗の二ヶ条掟書や牧野親成の九ヶ条の発令に示されている。<sup>46</sup>

京都町奉行が所司代の京都市中の支配・統轄を引き継いだことは、すでに指摘されているように、宮崎・雨宮が寛文八年（一六六八）に京都町奉行に任命されたとき、板倉・牧野の三〇ヶ条に基づいた公事

表5 所司代組与力・同心役職・役席

役職	役席	
	与力	同心
同心支配	5	—
上納金役	2	2
外側御破損役	2	—
御蔵目付	3	—
御武具方	—	12
組頭	—	10
目付	2	4
旧記	4	4
計	18	32

備考：『京都武鑑』上

訴訟の取扱を市中に触れている点に示されている。京都町奉行が町方支配を遂行するためには実働部隊が必要で、それが与力・同心である。京都町奉行の場合、元禄一二年（一六九九）以降、与力二〇騎・同心五〇人（四〇騎一〇〇人）の定員で固定されるが、近世京都の与力・同心の定員の固定では一番最後であった。その意味で、京都町奉行所の与力・同心の定員の固定は京都における与力・同心体制の確立の指標といえよう。

さきにみたように、寛文期には京都の与力・同心も軍事的動員からは除外され、役務と勤務場所の固定が進行し、地付・土着の武士、地役人として取り扱われる存在となっていた。寛文八年に京都町奉行が任命された時点での与力同心は、それぞれ与力五騎と同心一〇人（両町で一〇騎・二〇人）であった。<sup>47</sup>このうち寛永一〇年にそれぞれ二〇騎・五〇人に増員され、元禄九年から一一年にかけての京都・伏見両町奉行所機構変更の変動を経て、元禄一二年に元のように東西両町で四〇騎一〇〇人の定員となった。これらの与力・同心の定員がどのような系譜を持っているのかを検証しておきたい（表4参照）。

京都町奉行の町方支配は所司代の職務の引き継ぎであったから、その実働部隊もそうであったと推測することができる。役職としての系譜は、さきにみたように、所司代から京都郡代五味豊直と伏見郡代小堀政一へと職務分轄され引き継がれた。その過程で、与力・同心も引き継がれたと見られるが詳細は不明である。ただ宮崎・雨宮の前職小出尹貞が万治三年（一六六〇）一月二日に五味の跡職として任命されたとき、その与力・同心を引き継いだ記事が『実紀』にある。<sup>48</sup>

小姓組番頭小出越中守尹貞千四百石加恩ありて五千石になされ京地の代官命ぜられ。伏見城代水野石見守忠貞と共に 大内の事とりはかるべしと仰付られ。今まで五味備前守豊直所属の与力十騎・同心三十人を属せられ。別に同心二十人を増加せしめらる。

小出はこのとき「京地の代官」（京都郡代）として与力一〇騎と同心五〇人を配属された。それが五味豊直に属していた一〇騎・二〇人を含むことが明らかである。五味豊直の与力・同心は、正保四年（一六四七）に五畿内の訴訟沙汰の取扱に加えて丹波・近江の奉行となった際に配属された与力一〇騎と同心三〇人であった（表2）。

また正保四年に小堀政一の死去後「伏見郡代」を引き継いだ水野忠貞は、同時に与力一〇騎と同心三〇人を預けられている。小出が京都郡代に任命されて補属させられた与力・同心と同じ定員である。これは万治三年に至って両郡代の実務員数の均衡が図られた結果であろう。宮崎も雨宮も任命時点の最初の与力は五騎、同心一〇人であったが、このころから定員二名の奉行職での配属定員の均衡が図られるようになったといえよう。

万治三年以降、京都郡代と伏見郡代附属の与力・同心が同定員となり、寛文五年に小出が没して宮崎・雨宮に引き継がれ継続されることとなる。この時点では伏見郡代がまだ在職しているので、京都郡代を引き継いだとされるのであろう。それゆえに与力・同心も小出の与力・同心を引き継いだとみてよいが、詳細は不明である。この後、寛文八年に両人が京都町奉行となった際に、両町奉行の与力・同心は五騎・一〇人（一〇騎二〇人）が配属され、同一〇年に二〇騎五〇人

（四〇騎一〇〇人）に増員される。八年の時点では水野は伏見郡代を免じられており（六年）、京都町奉行を基軸にした京都市中・周辺地域の支配・統轄体制への転換が図られていたことの現れとみられよう。なお水野の跡、九年五月に伏見町奉行となった仙石久俊は与力一〇騎同心三〇人を配属させられ、以後伏見町奉行所与力・同心の定員となる。これは、さきに見たように、水野が小堀の跡を継いだとき配属された与力・同心と同数であることから、それを引き継いだとみてよい。<sup>49</sup>

以上を勘案すると、京都町奉行の与力・同心は、加藤正次の二五騎・足輕同心五〇人に始まり、五味・小堀、特に五味への寛永六年の同心二〇人の附屬、正保四年の与力一〇騎同心三〇人の増員を経て、万治三年には小出に引き継がれ、一〇騎五〇人となった。これを前提に宮崎・雨宮の与力・同心の定員も設定されたのである。

## おわりに

以下、本稿で検討した事柄のまとめと疑問点を提示しておきたい。

与力・同心が地域支配の実働部隊となるためには、その本来の職務である軍事的出動への動員と助力ではなく熟練した実務官吏となることを、与力・同心たちだけでなく、彼らを配属する領主（將軍）も無自覚ではあったとしても趨勢的に求められていたといえよう。それは京都所司代や大坂町奉行所、また二條城御門番組の職務の遂行には所司代・町奉行また御門番組の頭などだけでは不可能であり、その下で

実務に従事する役人が必須となる。各役職に配属された与力・同心はその実務に習熟することが御恩・奉公そのものであり、そのためにこそ軍事的な助力要員から熟練した官吏に変容することが必要であった。その変容・変質の契機が地方知行の停止、現米供与への切り替え、また軍事的な出動・動員からの除外であった。

それは京都所司代与力の場合、元和六年（一六二〇）の与力・同心の廃止、その俸禄米の所司代役地への組み込みであった。この所司代与力・同心の復活が承応四年とすれば、元和六年から承応四年（二六五五）の間、所司代の職務の実務はどのように遂行されていたのが疑問となるが、宝暦九年（一七五九）の京都武鑑などをみると、所司代所屬の職務に城代（二人）・年寄（二人）・用人（二人）・番頭（四人）・取次（九人）の記載があり、<sup>50</sup>京都市中の管理統制を度外視すれば、郡代や伏見奉行や家臣団も含めて一応の職務遂行は可能であったとみられる。承応四年の復活は郡代五味の死去もあって、職務の遂行が不十分になっていたためとも考えられる。与力・同心不在期間の状況が解明される必要がある。

また二條城御門番組の与力・同心は、本来將軍の番城を守衛・警固する役職であるから、当然に軍事的な出動の意味合いが濃い。しかし御門番組の頭は旗本で地方知行を給与された將軍直臣団の一人であるから、必然的に時期が来れば移動する。西御門番組の頭であった柘植氏も二代で他の役職に替わり、追手御門番組の頭春日氏もまた二代で交代している。

そうであるからこそ、御門番の職務の遂行には熟練した役人が必要



となるのである。島原の乱の際に、御門番組の与力・同心らが大阪まで下向しながら出陣を差し留められたことの理由も、二條城守衛・警固の職務の遂行を優先させたためとも考えられ、それゆえにこそ熟練した二條城守衛の専門家であることを求められたといえよう。二條城の御門番組与力・同心の場合は、これがさらに地役人としての土着化を推し進めたのである。

京町奉行所の与力・同心については、宮崎・雨宮が正式に京町奉行となったのは寛文一〇年五月朔日であったが、「京都の三奉行」また所司代設置のころに配属された与力・同心が、京都郡代・伏見郡代などへの職務分割と与力・同心の廃止と復活また配属を繰り返しながら、伏見奉行をへて京町奉行の与力・同心の配属に帰着したといえよう。もちろん同一ではないが、入れ替わりを経たうえでの帰着という見合いで、京町奉行所の与力・同心の成立を、とりあえず京都における与力・同心体制の確立としておきたい。<sup>51)</sup>

#### 〔注〕

- (1) 拙著『大坂町奉行と支配所・支配国』（東方出版、二〇〇五）。
- (2) 『国史大辞典』の解説を参照。
- (3) 拙稿「大坂町奉行所与力・同心体制の確立」（『佛教大学文学部紀要』九〇号）。なお拙著『大坂町奉行所異聞』（東方出版、二〇〇六）のⅡ章の「二 町与力・同心の編成と勤務」も参照されたい。
- (4) 京都の与力・同心の研究は多くない。『京都の歴史』第五巻・第六巻には『京都御役所向大概覚書』『京都武鑑』などによる概説がある。また安国良「町奉行所の役人」（京都町触研究会編『京都町

触の研究』岩波書店、一九九六）の研究もあるが、『京都武鑑』と『京都御役所向大概覚書』の誓書（起請文）による職務の解説である。いずれも近世京都の与力・同心を地付・土着化の経過からみた研究ではない。

(5) 『寛政重修諸家譜』（以下『諸家譜』）第九。

(6) 『徳川実紀』（以下『実紀』）『諸家譜』のほか江戸幕府の日記でも確認できない。

(7) 『諸家譜』第十三巻。

(8) 『諸家譜』第二巻。『慶延略紀』（内閣文庫所蔵史籍叢刊81）では元和五年の項に記され、同年三月に父重宗が隠居している。「今の呈譜五年三月」はこれに一致する。

(9) 岩生成一監修『京都御役所向大概覚書』（清文堂史料叢書、清文堂出版、一九七三）上、以下『大概覚書』と略記。所司代附属の与力・同心が廃止された後、おそらくは五味や小堀配下の与力・同心に配置替えされた者もいたとみられるが、詳細は不明である。所司代の与力・同心はこの後承応四年に牧野親成（佐渡守）が所司代に任命されたときに復活する。ちなみに元和五年には伏見城代が廃止されて大坂城代が設置され、大坂町奉行も設置されている。

(10) 『諸家譜』第三巻。

(11) 『諸家譜』第十五巻。

(12) 『諸家譜』第十六巻。

(13) 『実紀』第三篇、四七七頁。

(14) 『諸家譜』第六巻、『大概覚書』上。

(15) 『大概覚書』上。この後、元禄九年から京町奉行が三人となり、伏見がその支配下に入り伏見奉行が廃止されたが、元禄一二年に元に戻され伏見奉行も復活する。伏見奉行所属の与力一〇騎・同心五〇人も京町奉行所属で与力一〇騎・同心四〇人となっていたが、再置とともに一〇騎五〇人となった。以後このまま推移する。

(16) 『実紀』第一篇、『諸家譜』第十七。丹羽家文書『御組由緒記』。なお拙稿史料紹介「丹羽家文書『御組由緒記』——二條城守衛與力由緒

記録―」（佛敎大学史学会『鷹陵史学』第三十六号、二〇一〇）を参照。

- (17) 『実紀』第一篇、『諸家譜』第九。前掲拙稿「丹羽家文書『御組由緒記』」参照。
- (18) 『実紀』第二篇、前掲「丹羽家文書『御組由緒記』」。
- (19) 『実紀』第二篇、前掲「丹羽家文書『御組由緒記』」。
- (20) 『慶延略紀』。
- (21) 神沢貞幹『翁草』第二卷。
- (22) 前掲「丹羽家文書『御組由緒記』」。
- (23) 前掲「丹羽家文書『御組由緒記』」。
- (24) 前掲「丹羽家文書『御組由緒記』」。
- (25) 前掲「丹羽家文書『御組由緒記』」。
- (26) 前掲「大坂町奉行所与力・同心体制の確立」参照。
- (27) 『京都武鑑』（京都市歴史資料館）の宝暦九年（一七五九）の御役録による。
- (28) 『諸家譜』第二卷、前掲「慶延略紀」、「実紀」第二篇。
- (29) 「板倉周防守（重宗）被定置候式拾壹ヶ条之事」（『大概覚書』上）、『京都の歴史』第五卷・第六卷。
- (30) 近世以前からある京都町方の行政機構と、町方の治安維持に関しては雑色の存在も多きかったと見られるが、ここでは触れない。
- (31) 『諸家譜』第二卷、『大概覚書』第一卷。『京都の歴史』第 卷。但し牧野の系譜にも『実紀』にも与力・同心の復活の記事はない。
- (32) 前掲「丹羽家文書『御組由緒記』」。
- (33) 前掲「丹羽家文書『御組由緒記』」。
- (34) 前掲「丹羽家文書『御組由緒記』」、『諸家譜』第二。
- (35) 前掲「丹羽家文書『御組由緒記』」。
- (36) 前掲「大坂町奉行所与力・同心体制の確立」および『大坂町奉行所異聞』参照。なお与力・同心は「与力十騎足軽五十人預け」とも表記されており、同心が足軽と同じ位置づけであったことがわかる。
- (37) 前掲「大坂町奉行所与力・同心体制の確立」。

- (38) この人数は慶長六年に加藤正次に付属させられた与力二五騎・同心五〇人に一致している。
  - (39) 「慶延略紀」四、寛文五年七月一三日条。『諸家譜』第四卷・第一六卷。
  - (40) 「慶延略紀」三、万治三年一月二二日条。『実紀』第四篇、万治三年一月二二日の条。
  - (41) 『実紀』第三篇、正保四年三月三日条、『諸家譜』小出
  - (42) 『諸家譜』第四卷および第一六卷。
  - (43) 『大概覚書』上、一九二頁。
  - (44) 『大概覚書』上、一九〇、一九一頁。
  - (45) 藤井讓治「京都町奉行の成立過程」（前掲『京都町触の研究』）。
  - (46) 『京都の歴史』第五卷・六卷、京都町奉行関係の部分参照。および『大概覚書』上、一九〇、一九一頁。
  - (47) 『諸家譜』第四卷および第一六卷。
  - (48) 『実紀』第四篇、万治三年一月二二日の条。
  - (49) 『諸家譜』第五卷・第六卷。
  - (50) 前掲『京都武鑑』。
  - (51) これ以後所司代組、京都町奉行組、伏見奉行組などの組与力・同心として、町方（京都市中ほか）の治安維持、警察機構として活躍することになる。なお禁裏方にも禁裏附与力二〇騎・同心八〇人、二條城番にも城代組同心、鉄砲奉行・御蔵衆（また御殿掃除方）にも与力・同心が配属されている。その検証は今後の課題であらう。
- 〔付記〕二條城御門番組関係史料の閲覧に関しては、丹羽氏昭氏のご厚意を得た。記して感謝申しあげます。

（わたなべ ただし 歴史学科）

二〇一一年十一月十五日受理